

# イギリスの書評文化（２）：書評に対する作家たちの高慢と偏見

— ロマン派の詩人たちを中心に —

Reviewing the review (2): Reviews and the Romantic Poets

楚 輪 松 人

Matsuto SOWA

## はじめに

書評が本の売れ行きに与える影響とは如何なるものであろうか。ヴィクトリア朝時代の稀代の書評家ロバートソン・ニコル<sup>1)</sup>の書評活動を語る批評家ディクソン・スコットの1913年の弁によれば、書評とは、本の売れ行きにとって、諸刃の剣である。

毎週木曜日、『ブリティッシュ・ウィークリー』で、サー・W・ロバートソン・ニコルは、他のどの批評家が配下に置く読者よりも、はるかに数も多ければ、はるかによく反応を示し、はるかに真面目で熱心な読者に話しかける。彼がある本を褒めるとする — たちまちその本は人気を博す。彼がある本をそれとなく片づける — それでその本は死ぬ。彼は幾千の家庭の書棚を支配している。それは彼の指の下で鍵盤のように変化する。

— そしてすべての変化が精神の変化を意味する。クローディアス・クリアーが水曜日に読むものを、その週の終わらないうちにスコットランドの半分とイングランドの多くが読んでいるだろう。

(Gross 201)

書評の難点は、本の売れ行きばかりか、作家の評判や感受性を傷つけることである。ヴァージニア・ウルフ（1882-1941）のパンフレット『書評論』（1939）のなかで「書評無用論」を唱えたのもそのためである。書評が作家に対して行使する悪影響をウルフは次のように説明する。

書評が与える結果は、要約するのは決して容易ではないが、はっきりしている。つまり書評が著者の売れ行きに対し、また著者の感受性に対して及ぼす影響である。書評は疑いもなく売れ行きに大きな影響を与えた。例えば、Thackeray は *Esmond* に対する *Times* の書評が、「この本の売れ行きを完全に止めてしまった」<sup>2)</sup>と言っている。書評はまた著者の感受性に、売れ行きのように計算はできないが、莫大な影響を与えた。Keats に及ぼした影響は悪名高い。また感じや

1) Sir William Robertson Nicoll (1851-1923)。“クローディアス・クリアー” (“Claudius Clear”) の筆名で、自ら創刊・編集した週刊雑誌 *The British Weekly* (1886-) に、毎週、非国教会派の立場から30年以上にわたって、政治・文学を評論し続けたスコットランドの文筆家。

2) "...one of my own books [*Esmond*], of which the sale was absolutely stopped by a *Times* article." かつての自らの失敗例を他山の石とするようにとサッカレーが G. F. Atkinson に与えた忠告 (1858年12月27日付) の言葉である (Bowlby 212)。

すい Tennyson<sup>3)</sup> に対しても。書評家の言うままに彼はその詩を変更しただけでなく、実際、海外に移住しようと考えたのであった。ある伝記作家によると、書評家たちの敵意によってひどい絶望に投げ込まれたので、まる10年間、彼の精神状態は、従って彼の詩も、そのために変わってしまった。(Woolf 205)

ウルフの指摘するように、書評は本の売れ行きという計測可能な影響と、著者の感受性への影響という計測不可能な影響を及ぼす。

以下の拙論では、"Upon Keats the effect is notorious." と、ウルフが「悪名高い」と形容する書評の「キーツに及ぼした影響」をめぐって考察する。具体的には、キーツ(1795-1821)、シェリー(1792-1822)、バイロン(1788-1824)、そしてコールリッジ(1772-1834)ら4人のロマン派の詩人たちの書評に対するそれぞれの反応を取り上げ、作家と文芸評論誌との因果関係、さらには書評ジャーナリズムに対する作家たちの高慢と偏見を表明する具体的な発言を検証して行きたい。

### 1. キーツの苦悩

キーツは書評に消し去られた。少なくとも酷評のためにその死期を早めたと云われている。1818年4月出版の物語詩『エンディミオン』(*Endymion*)は、出版後、直ちに保守派ないしは体制派の評論誌の格好の餌食となった。同年4月の『クォータリー・レビュー』、同年6月の『ブリティッシュ・クリティック』、

同年8月の『ブラックウッズ・マガジン』などの定期刊行物による酷評にさらされたのである。以下、キーツの『エンディミオン』に対する評論誌の酷評を具体的に見てみよう。

(1) 1818年4月号の『クォータリー・レビュー』

書評子はアイルランド生まれの政治家・評論家の J. W. クローカー(1780-1857)で、彼はこの一編の酷評によって英文学史に名を残すことになる。クローカーの書評は正直をその旨とする。彼は自分が『エンディミオン』の第2巻以降を読まずに書評を書いていることを率直に告白して、その批評を始める。

書評家は、時々、読んでもいない作品を批評していると非難されることがある。今回の場合、筆者は、そのような不満が著者から出されるものと予想するし、また彼の作品を読んでいないことも正直に告白するものである。その理由は筆者の義務心の欠如のためではなく(そんなことは滅相もない)、実際、それを読了しようと、筆者は、この超人的な物語を主題とするらしき作品そのものにも負けないくらいの超人的な努力をしてきた。しかし、筆者の持てる最高度の堅忍をもってしても、全4巻から成るこの詩的ロマンスの最初の巻としか悪戦苦闘できなかったと告白せざるを得ない。筆者は、もしひとつの慰めがなかったならば、この精力の欠如を、あるいはそれが何であれ、自分の側に欠如していることを大いに嘆くべきであろう。——すなわち、筆者は、未だ見てもいない残り3巻の意味がわからないように、骨折ってこれまで読んできた第1巻の意味もわからないという慰めである。

それがキーツ氏(これが彼の本名だとしたの話である。正気の人間ならこんな狂想的な詩にまさか自分の本名など記す

3) 書評家に恐れをなして海外逃亡まで企てたテニスンにとって、書評はまさしく恐るべき存在であった。それはテニスンをして「詩人の生涯の最も生き生きとした年月——すなわち23歳から32歳の間——の出版を思いとどまらせた」のである(Nicolson 117)。彼の文学的発展に与えたその効果については、詳しくは Alan Lang Strout, "Christopher North' on Tennyson." *RES*, 14 (1938): 428-39 を参照のこと。

はずはなかろう)のせいではない。そうではない。筆者が言わんとしているのは、この著者には、言葉の力、空想の光、天才の輝きがないということではない——彼はこれらすべてを備えている。ただ、不幸にも、彼は「コックニー詩」と呼ばれている新しい一派の弟子の一人なのである。コックニー詩とは、最も粗野な言語で書かれた、最も莫迦げた考えから成り立つと定義してもよからう。(Croker 204)

この酷評におけるクローカーの本意は、「コックニー詩人」—— J. G. ロックハートがリー・ハント (1784-1859)、ハズリット (1778-1830)、シェリーなどの詩人に与えた嘲笑的な綽名——への攻撃に関係していたのである。不幸なのはその巻き添えを食ったキーツというべきであろう。

作家に対して、酷評と同時に建設的な忠告を与えるのが書評家の義務である、とクローカーは想定する。読了してもいない『エンディミオン』を書評するにあたり、彼はキーツが付した「序文」に注目する。ある意味では、この「序文」こそ、キーツの自虐と自信とが相半ばするテクスト、彼のような境遇の人物にありがちな僻み<sup>ひが</sup>が鼻に付く文章である。事実、「初めから終わりまで自我中心主義である手紙」(Doi 394)を書き続けた詩人にふさわしい「序文」となっている。曰く。

この若い未熟な作品は消えてなくなってしまうのが当たり前です。この作品が次第に消えてなくなっていく間に、生きるにふさわしい詩を企て、それに自己を適合しようという希望が持てなければ、それはわたしにとっては悲しいことです。

これはあまりにも生意気な言い方であるかもしれませんが、罰に値するかもしれません。しかし感情のある人なら罰を

加えようとお思いの方はいないと思います。むしろ、ひとつの偉大な目的を持った失敗ほどすさまじい地獄は存在しないという確信をもって、わたしをそっとしておいてくれるでしょう。これはもちろん、批評を先取りするために、下心があって申すものではありません。むしろ英文学の名誉に対して、熱烈な眼<sup>まなこ</sup>をもって、見つめる資格のある方々の尊敬を得たい所存であるからです。(Allot 119)

キーツのこの「序文」の言葉を受けて、クローカーは次のように言う。

キーツ氏自らが「この未熟な、熱っぽい試み」に対する批評として、作品自体のすでに十分に熱っぽい言葉で非難している。ならば、筆者は告白せざるを得ない、もうこれ以上、彼に批評の「すさまじい地獄」の責め苦を加えるのは控えるべきでないか、と。それは彼の想像力を怯えさせる。これからも書き続けたいのでどうぞご容赦ください、と彼は嘆願しているではないか。筆者は、彼のうちに正当に評価されるにふさわしい、少なくともその間違いは警告されるべき程度の才能を見出しているのであるから。

(Croker 205)

クローカーの書評、それ自体は、決して毒舌に満ちた悪意のある内容ではない。しかし、キーツにとって、『クォータリー』誌上で酷評されることは大きな衝撃であったに違いない。なぜなら、重要なのは、表現内容そのものよりも、むしろその書評を伝達する媒体だからである。時代の印刷文化において、『クォータリー』の存在は絶大であった。『ロマン派の天才と文芸雑誌』(2005)の著者によれば、「『クォータリー』とそのライバル誌である『エディンバラ・レビュー』は、19世紀の最初の20年間、英国の文芸文化を支配していた」

(Higgins 13)のである<sup>4)</sup>。実際、当時の人々にとって、『クォーターリー』は、「ただ聖書にのみ次ぐ」("second only to God's bible")とされ、教養ある男女ならば、その見解は誰も無視することのできないひとつの権威(Niclson 111)だったからである<sup>5)</sup>。

## (2) 1818年8月号の『ブラックウッズ・マガジン』

ハント、ハズリット、キーツなどのロンドンの文人たちを嘲笑・攻撃した「コックニー詩人について」と題する連載評論は、1817年10月の『ブラックウッズ・マガジン』創刊以来の6回にわたる特別企画であった。この批評の本意は、『エグザミナー』に拠って反体制派の論陣を張っていた進歩派の総帥ハントを攻撃することであった。すなわち、パイロンが「ロンドン子たちの偶像」("idol of the Cockneys"; Matthews 132)と呼んだハントである。キーツの『エンディミオン』に対する公然の非難は、「コックニー詩人」攻撃の一環として書かれ、前述のように、むしろキーツはそのとばっちりを受けた格好であった。

この書評の執筆者はスコットランドの著述家 J. G. ロックハート (1794-1854) で、"Z" という匿名のもとに毒舌をふるい、その連載の第四回目で『エンディミオン』を書評した。このあたりの事情に関して、我が国における「イギリス文芸ジャーナリズム」研究の先鞭

をつけた出口保夫氏は、次のように指摘する。

この雑誌が前後6回にわたって連載した"On the Cockney School of Poetry"は、Scott の娘婿 John Lockhart の筆になるものだが、その攻撃目標は、「野党、過激派、急進的無神論者、扇動家」としての Hunt であった。(中略) この"Cockney School"の攻撃によって、もっとも大きな痛手を蒙ったのは Keats である。彼は表面的には落ち着きを装ってはいるものの、経験のとぼしい若い新進の詩人にとって、B.E.M. の毒舌は相当身にこたえたことであろう。(出口「イギリス文芸雑誌の発達」(4) 185)

ロックハートの悪意ある批評は、不朽の悪名を獲得するにふさわしい非道な書評、秀抜な酷評の適例である。評論は次のように始まる。

この狂乱の時代にあって、あらゆる偏執狂のうち、最もありふれていると同時に、最も癒しがたいものは、「作詩狂」<sup>メトロマニア</sup>に他ならないのではないか、と思われる。ロバート・バーンズ [訳注: Robert Burns, 1759-96, スコットランドの国民詩人] やミス・ベイリー [訳注: Joanna Baillie, 1762-1851, スコットランドの劇作家・詩人] のちょっとした名声が、はっきりとした数は分からない

4) <sup>ホイッグ</sup>自由党の弁護士たちの一派による1802年創刊の『エディンバラ・レビュー』に対抗するべく、出版者<sup>エディン</sup>ジョン・マレー (1778-1843) を中心に、1809年、保守党のグループによって創刊されたのが『クォーターリー・レビュー』である。また、『エディンバラ』がコールリッジ、サウジー (1774-1843)、ワーズワス (1770-1850) などの「湖畔派詩人」("Lake School") に対する攻撃で知られるように、この新刊の『クォーターリー』も、シェリー、ハズリット (1778-1850)、キーツなどのロマン派の第二世代の詩人たち、あるいは「コックニー詩人派」("Cockney School") と彼らが称する詩人たちに対する攻撃を開始したのである。

5) キーツは、後述の1819年5月17日付けの弟夫妻への手紙にもあるように、「大衆」("commonplace people") を烏合の衆と理解していたようである。ハズリットのエッセイ *The Round Table* (II. 204, 1817) にある言葉を引用して、「彼らは『エディンバラ』や『クォーターリー』を読んで、その評論が言う通りに思考する」(Letter to Benjamin Bailey, 28-30 Oct. 1817; Gittings 30) と言う。そして、この種の人間を表現して曰く、「物事を何でも文字通りに理解する人間は、非常に浅薄な人間だ。多少とも価値のある人間の生活というのは、連続した<sup>アレゴリー</sup>寓意なのだ——そしてそういう人間の生活を秘密を理解できる人間は大変少ない(中略)——シェイクスピアは寓意の生涯を送ったのであり、彼の作品はそうした生涯の注釈なのだ」(Letter to George and Georgiana Keats, 3 (?) March 1819; Gittings 218)



が、数多くの農場労働者や未婚婦人の頭を爰にってしまうという気の滅入るような効果を発揮している。筆者の従僕でさえ悲劇を作文しているし、この国には帽子入れに一卷の抒情詩を隠し持っていない退職した老齢の女家庭教師は一人もない。どんなに弱々しいものでも、人間の理解力が患っているのを目撃するのは憂鬱なことである。しかし、能な知性が狂気に陥っているのを見るのは大変な苦しみである。筆者は、キーツ氏の場合を、このような悲しみの気持ちをもって思いめぐらしてきた。この若者は、自然から、卓越した、もっと高度な次元の才能を受けているようである——何か役立つ目的の職業に捧げられたなら、彼をして、傑出した市民とまでは言わないまでも、リスベクタブル立派な市民にしたであろうような才能である。筆者が理解するところでは、彼の友人たちは彼が医業に就くことを運命づけていた。そして、数年前、彼はロンドンの尊敬に値する薬剤師の徒弟となった。しかし、筆者が言及してきた疾患に襲われて、すべてが台無しとなったのである。(Lockhart 519)

この書評を終えるにあたりロックハートは底意地の悪い痛烈な最後の一撃を加える。

筆者は、敢えてささやかな予言を申し添えておこう。すなわち、彼の出版者は、二度と、彼が書くものに50ポンドを賭けることはないだろうと。飢えた詩人になるよりは飢えたる薬剤師になる方がまだましで、賢明なことである。だから、ジョン君よ、薬剤店へ帰りたまえ。「膏薬、丸薬、軟膏の箱」その他に戻るがいい。でも、後生だから、若きサングラド先生<sup>6)</sup>、君の詩のような、言い訳と催眠術はもう少し控え目にしてくれたまえ。

次に、これら評論誌の酷評に対するキーツの反応を年代順に見ていこう。そこで明らかになることは、キーツは初めから体制派の評論誌に対して浅からぬ因縁を感じていたこと、そしてそれは評論誌に対するキーツの対決姿勢だということである。

#### (1) 1817年11月17日付のベンジャミン・ベイリー宛の手紙

キーツは『ブラックウッズ』に掲載された評論<sup>7)</sup>に関心を持ったことを伝えている。

『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』に、燃えるようなハント攻撃が出ていました。こんな毒々しいものを読んだことはありません。——ハントの最大の罪を糾弾して、彼の妻、彼の詩——彼の癖——彼の友人、彼の会話などを貶めているのです。こういう公然の非難演説は続々出てくるようです。——これを称して「コックニー詩人派」というのです。——第1号が出ただけですが——それにはハントのことが書いてあって、コーネリアス・ウェブなるヘボ詩人が題辞を書いています。(中略)この題辞は、ハントとキーツという文字を花文字に書いてあります。——次号で私が槍玉に挙げる計画であることは確かです。(Letter to Benjamin Bailey, 17 Nov. 1817; Gittings 33-34)

#### (2) 1818年6月10日付のベンジャミン・ベイリー宛の手紙

半年後、キーツは、再び、『ブラックウッズ』と『クォータリー』に掲載された評論に関心を示していることを伝えている。

6) "young Sangrando" とは、フランスの作家ル・サージュ (1668-1747) のピカレスク小説『ジル・ブラース』(1715-35) に登場する医者のこと。「序文」における言い訳、そして読者に与える催眠効果たっぷりの『エンディミオン』に対する痛烈な皮肉である。

7) "On the Cockney School of Poetry, No. 1," *Blackwood's Edinburgh Magazine*, Oct. 1817, pp. 38-41.

『エディンバラ・マガジン』はまたもやハント攻撃<sup>8)</sup>を始めて、そのなかで私のことを「気立ての良いキーツさん」("the amiable Mister Keats")と呼んでいます。——また、『クォーターリー・レビュー』の連中からは、月桂樹以上のものをもらっています。彼らはハントの詩集『草の葉』を書評するなかで私をいぶしたからです。(Letter to Benjamin Bailey, 10 June 1818; Gittings 100)

(3) 1818年10月8日付の J. A. ヘッシー宛の手紙

キーツは『ブラックウッズ』と『クォーターリー』の敵意あらわな『エンディミオン』の書評に言及しながら、その内なる思いを出版者ヘッシーに吐露する。表現されているのは書評に対して超越的であろうとするキーツの強がりであろうか。彼の信奉する絶対的基準、すなわち美に対する信仰告白に似た、某かの悲愴感の漂う文面である。

深遠なものの中に存在する美を愛するがゆえに、自作を辛辣に批評する者にとって、称賛も非難も、世間の批評は一時的な影響でしかありません。自分が、人知れず、心のなかで、自作に対して行う批評は、『ブラックウッズ』や『クォーターリー』が加える得る苦痛とは比較にならない、ずっと大きな苦しみを私に与えたのです。また、自分で自分が正しいと思っているときには、どんな外部の称賛も、美しいものに対する私自身の再確認や是認ほどの喜びの輝きを与えることはできないのです。(Letter to J. A. Hessey, 8 Oct. 1818; Gittings 155)

(4) 1818年10月14日付の弟ジョージ&ジョー

8) "Letter from Z. to Leigh Hunt," *Blackwood's Edinburgh Magazine* (May 1818). ハントの詩集 *Foliage* (1818) は『クォーターリー』(Jan. 1818)で書評されていた。

9) 物語詩『イザベラ』のこと。

ジーアナ夫妻宛の手紙

弟夫妻に対して、書評にはほとんど苦痛を感じないと書くキーツ。それは決して強がりなどではなく、自己の才能に対する絶対的な自負のなせる業であろうか。

レノルズは、『ブラックウッズ・マガジン』と『クォーターリー・レビュー』に載った僕の詩に対する攻撃への返答として、「めぼうきの鉢」<sup>9)</sup>を出版するように僕に勧めている。僕の詩を弁護する手紙が『クロニクル』紙に2通と『エグザミナー』に1通載った。『エグザミナー』の1通は『アルフレッド・エクセター』紙にレノルズが書いたのを転載したものだ。『クロニクル』紙には誰が書いたのか分からない——だが、こういうことは今だけのことだ——僕は、死後、英国の詩人たちのなかに列せられることになるだろうと思う<sup>10)</sup>。(Letter to George and Georgiana Keats, 14 Oct. 1818; Gittings 161)

(5) 1819年5月17日付の弟ジョージ&ジョージアナ夫妻宛の手紙

しかし、その一方で、評論誌の絶大なる力を前にして、キーツは無力感を感じている。

忍耐強くやれば数年のうちに成功疑いなしだ——だが、今は辛抱しなければならない——ああいった評論誌は人々の心を意気阻喪させ、怠惰にする——自分が考えてものを言う人間は少ない——こう

10) 「僕は、死後、英国の詩人たちのなかに列せられることになるだろうと思う」(I think I shall be among the English Poets after my death.) というキーツの予言は的中した。キーツの現代的評価、その一例には次のようなものがある。「生き生きとしたイメジャリー、すぐれて官能的なアピール、古典の世界の失われた栄光に対する憧れによって、彼の作品のすぐれたものは英国の伝統のなかでも最も偉大なものである」("Marked by vivid imagery, great sensuous appeal, and a yearning for the lost glories of the Classical world, his finest works are among the greatest of the English tradition." "Keats, John." *Britannica Concise Encyclopedia*, 2004)

した評論誌はますます強力になりつつあるが、特に『クォーターリー』がそうである——それらは迷信と同じで、より多くの群衆を征服し、より長くその力が続くほど、群衆が弱くなるのに比例して、その力がますます強大になっていくのだ——かつて、僕は、大衆がこうした疫病神たちのペテンと不正のすべてを見れば（今も見ているに違いないが）、大衆はそれを許さないだろうという希望を持ったことがある。だが駄目なのだ。大衆は闘鶏場のような国会議事堂の見物人と同じだ——喧嘩は好きだが、どっちが勝っても負けてもお構いなしなのだ。（Letter to George and Georgiana Keats, 19 Feb. 1819; Gittings 216）

(6) 1819年5月17日付の弟ジョージ&ジョージアナ夫妻宛の手紙

しかし、キーツの評論誌に対する対決姿勢はおさまることを知らない。

『ブラックウッズ』の評論は、ひどい邪道に踏み込んでいる——エトリックの森の羊飼いのホッグをバーンズに対抗して押し立てているのだ——非常識なならず者だ<sup>11)</sup>。（Letter to George and Georgiana Keats, 17 March 1819; Gittings 227）

(7) 1819年9月18日付の弟ジョージ&ジョージアナ夫妻宛の手紙

詩人としてのキーツの可能性は、『エディンバラ・レビュー』の主筆、「湖畔派詩人」を理解できなかったフランシス・ジェフリー（1773-1850）によっても大いに認められているところであった。しかし、それに対してキーツは言う。

ツは言う。

『エディンバラ・レビュー』は、僕の詩に触れることを恐れている——彼らにはそれをどう扱ったらいいいのかわからないのだ——<sup>けな</sup>貶したくはないし、かといって褒めるのは怖いのだ——僕がクエーカー教徒の帽子をかぶるのを恥づかしく思うと同じくらい、彼らはそれを褒めるのが恥づかしいのだ——要するに、彼らには真の鑑賞力がないということだ——とても厄介な問題なので、自分の判断力を敢えて危険にさらそうとしないのだ——もしこの次、僕が本を出したとき、彼らがそれを褒め、そして『エンディミオン』のことで持ち出したりしたら——彼らのまったく気に入らないやり方で何か言てやろうと思っている——『エディンバラ・レビュー』の臆病さは、『クォーターリー』の毒舌よりももっと悪い。（Letter to his brother George, 18 Sept. 1819; Gittings 314）

確かに、臆病さが毒舌よりも悪影響を及ぼすことがある。

書評によって左右されることになったキーツの生涯ではあったが、実は、キーツが書評に殺されたという風評、その流言蜚語の発生と普及には、出版者の捏造が絡んでいた。出版者テラーは以下のような「1820年詩集に付けた出版者の広告」（The Publishers' Advertisement to 1820）を作文し、結果的には、『エンディミオン』に対する不評が未完の長編詩『ハイピリオン』（Hyperion, 1818）の筆を折らせたという伝説を作り上げるのに一役買ったのである。

未完の詩『ハイピリオン』を印刷したことについて、もし弁解が必要であるならば、それは出版者が、作者の意に反して、特に懇願して印刷したもので、その

11) ホッグとはスコットランドの詩人・小説家の James Hogg (1770-1835) のことで、バーンズとはスコットランドの国民詩人 Robert Burns (1759-96) のこと。文面にある「ひどい邪道」(a scandalous heresy) や「非常識なならず者」(The senseless villains.) という表現に込められたキーツに憤慨には凄まじいものがある。

責任は出版者にあると申し上げたい。この詩は『エンディミオン』と同じ長さで書かれる予定でしたが、その作品に与えられた世評が、作者のこの仕事の進行を挫折させたのであります。（Allot 764）  
無論、この広告が事実無根であり、キーツは次のように腹を立てたと云われている。「これは僕がやったことじゃない——そのとき僕は病気だったんだから。これは嘘だ」（Allot 764）

## 2. シェリーの悲憤

1821年2月23日、キーツはローマで客死する。同年6月、シェリーは『アドネース』をピサにおいて執筆し、翌月の7月、同地で出版する。その副題に「『エンディミオン』、『ハイピリオン』、その他の作者ジョン・キーツの詩を悼むエレジー」（*Adonais; An Elegy on the Death of John Keats, Author of Endymion, Hyperion, etc.*）とあるように、『アドネース』はキーツの死を弔うシェリーの挽歌である。シェリーはキーツに対して直接的な深い個人的愛情を抱いてはいなかったが、その真価を認めて、「私を遥かに凌ぐであろうライバル」（“a rival who will far surpass me,” Letter to Mrs. Hunt, 11 Oct. 1820; Frederick, II. 240）と称えた対抗詩人であった。換言すれば、『アドネース』は、シェリーによる、真価を認められないまま酷評を浴びて、25歳で夭折した薄倖詩人の天才を惜しむ悲しみと、評論誌の妄評に対する熱烈な憤りの表現である。

シェリーにおいては、ギリシア神話の女神アフロディーテに愛された美少年アドニス<sup>1</sup>が、野猪のために非業の死を遂げ、皆に悼まれたという物語は、詩神ミューズによって愛された詩人キーツが時ならずして悪意ある批評家によって殺されたという伝説めいた物語と完

全に重なる。『アドネース』の「序文」には次のようにある。

キーツの『エンディミオン』に対する残酷な批評、『クォーターリー・レビュー』に現れた批評が、彼の繊細で感じやすい心に、乱暴極まりない効果を生ぜしめた。かくして始まった動揺は、キーツの肺の血管の破裂に帰結した。肺病による急速な衰弱が引き続き、その後に現れた彼の才能の真の偉大さを褒めるもっと率直な批評家からの好評をもってしても、かように気まぐれに加えられた傷を癒すのに効果はなかった。（Shelley 431）

敵意に満ちた書評がキーツの前に置かれると、たちどころに苦しみの徴候が現れ、肺病は、文字通り、彼の心身を消耗させたというのである。シェリーはバイロンに宛てた手紙のなかでもキーツの死因を説明して次のように書いている。

キーツの話は遺憾ながらまったくその通りなのです。ハントが話してくれました。失望の最初の発作で彼の血管が破裂し、こうして彼の肺病／消耗による急速な衰弱ができあがったわけです。（Letter to Lord Byron, 4 May 1821; Frederick, II. 289）

『アドネース』の「序文」において、シェリーの書評家の妄評に対する弾劾は続く。段落を改めて彼は次のように言う。

これら惨めな輩は、自分たちが何をしでかしているのか皆目分かっていない。毒を塗られた矢が、すでに多くの打撃を受けて、いくら打たれても何とも思わない平気な心に襲いかかるのか、それともキーツのようにもっと敏感な材料でできた心に襲いかかるのか、そんなことはお構いなしに、彼らは中傷や悪口を撒き散らしているのである。（Shelley 431）



『アドネース』の「本文」では、第26連から第29連に述べられた美少年アドニスを愛したユーレイニア [=アフロディーテ] の話は、アドニスの死の後悔、アドニスを殺した酷評家に対する呪詛、そして自己の無力さの告白となっている。その内容は斎藤勇博士の"NOTES" では次のように要約されている。

xxvi 彼女はその子アドニスと共に死なんことを望む。けれども時が続く限りは世にあらねばらぬ身にはそれができない。

xxvii 嘆かわしきは、アドニス (=キーツ) が時未だ至らざるに伝統を捨てて新しい詩を作り出し、けなげにも敵に戦いを挑んだことである。彼がもし時を待ったならば、人生の荒野における怪物を免れ得たであろうに。

xxviii キーツは年若きがため知恵にも軽蔑にも欠けるところがあり、従って悪罵冷笑を招いたのであるが、彼は当年の勇将たるバイロンのごとく批評家たちを撃退して、自らの地位を向上させることもできたであろう。

xxix 日没すれば星の輝き出づるごとく、大いなる天才が世を去れば他の天才は星のごとくきらめき、また日あるがために生命を受けつつも日を暗くしていた蚊などの群にたぐふべき群小批評家も、天才詩人が没すれば影をひそめる。(Saito 246-48)

第26連は特筆に値する。ユーレイニアが、亡きアドニスに向かって、嘆きの叫び声を発する愁嘆場であるが、知性にも訴える主知的な詩人シェリーの真骨頂<sup>スタンダ</sup>を発揮する連である。

ああ 優しい子よ、おまえは美しかったが、

なぜ人々の踏みならした道を、そんなにも急いで離れ、

心は強くあろうとも、弱い手で

洞窟の飢えた悪竜に挑んだのか？

おまえは無防備だったが、ああ それでは、

知恵という鏡の盾、軽蔑という矛はどこか？

もし時を待ち、おまえの心がその三日月を

満たしたなら、人生の荒野の

怪物どもは、鹿のようにおまえから逃れただろうに。(下線引用者)

キーツは、古典主義時代の詩人たちが「踏みならした道」、すなわち当時の詩の「常道」を行くことはなく、心を強く持って敢えて「洞窟の飢えた悪竜」、すなわち評論誌を牙城としている批評家たちに果敢に挑戦する。しかし、キーツは、ギリシア神話の英雄ペルセウスが蛇頭の怪物メデューサを退治したときの「盾」も「矛」も持ち合わせていなかった。

ギリシア神話やオウィディウスの描く『変身譚』のメデューサは、女神アテナ [=ミネルヴァ] の神殿で海神ポセイドンと淫らな戯れに耽り、アテナの怒りを買って、二目と見られない醜怪な容貌にされ、頭髪をことごとく蛇に変えられてしまった淫乱な怪女である。その怖ろしい顔を直視する者を、人といわず獣といわず、たちまちに石に化してしまうメデューサ退治において、ペルセウスは、相手を直視して自らが石化してしまうことなく、この憎むべき怪物を殺すために、ブロンズの盾を用いた。すなわち、ペルセウスは、その左手にもった輝く青銅の盾にメデューサの怖ろしい顔が映し出されるのを見ながら進み、死のごとき眠りが彼女を捕らえている間に、その怪物の首を刎ねたのである。

しかし、残念ながら、キーツには盾に映る

映像を見ながら功を奏したペルセウスの「知恵」がなく、大胆にも怪物との正面攻撃をしかけたのである。しかも、彼は敵を突き刺すための「矛」も持ち合わせていなかった。矛の先で相手を軽くつついて相手を軽んじるというやり方ができず、向きになって相手と戦った。その結果、その天才が十分に円熟するのを待たずして、死を早めることになったのである。

シェリーの見るところ、書評と相対峙するうえで肝心なことは、「知恵という鏡の盾」あるいは「軽蔑という矛」を持つことである。ちょうどバイロンの処女詩集『怠惰の時』（*Hour of Idleness*, 1807）が、『エディンバラ・レビュー』（Jan. 1808）に酷評されたとき、長篇詩『イングランド詩人たちとスコットランド書評家たち』（*English Bards and Scotch Reviewers*, 1809）という諷刺詩を書いて一矢を報いたように。それでは次に、そのバイロンと書評との関係を見ていこう。

### 3. バイロンの当惑

バイロンは、書評がキーツの命取りになったことを、当の『クォーターリー』の創刊者であり、また彼の詩集の出版者でもあるジョン・マレー（1778-1843）に問う。「シェリーがキーツのためにエレジーを書いて、——『クォーターリー』が彼を殺したと責めていることを知っているかね？」と問い掛け、続けて『マザー・グース』の一編、「コマドリの死と埋葬を悼んで」（"An Elegy on the Death and Burial of Cock Robin"）の第一連 "Who killed Cock Robin?" をもじって、次の有名な戯作を表している。

"Who killed John Keats?"

キーツを殺したのは何者だ？

"I," says the Quarterly,

『クォーターリー』曰く、「俺よ」

So savage and Tartarly;

<sup>せいばん</sup>生蕃のごとく、<sup>だったん</sup>韃靼のごとく。

"'Twas one of my feats."

「これまた、俺が手柄だわ」

Who shot the arrow?

矢を射ったのは何者だ？

The poet-priest Milman

「僧侶詩人のミルマンよ」

(So ready to kill man)

（引導を渡すのはお手のもの）

Or Southey or Barrow.

もしくはサウジー、もしくはバロー。

(Letter to John Murray, 31 July 1821)

この戯作が書かれる以前、バイロンはシェリーに次のような手紙を送っている。

キーツについて君の意見に対しては、  
<sup>はなは</sup>僕は甚だ残念に思っている。—— 真実そうなのかね。僕は批評というものが、あんなに残酷で殺人的であるとは思っていなかった。キーツの作品に対する君の評価については、僕は本質的に君とは意見を異にするけれども、むしろ僕は不必要な酷評はしないで、彼の最後はあんな風であったが、この詩壇の世界で最高の王座にいたものと思いたい。可哀想に！彼は放恣な自我を愛することにのみ追われて、恐らく大して幸福ではなかったに違いない。

僕は『クォーターリー』に載っていた『エンディミオン』についての書評を読んだ。なるほど酷評だ。—— だが、他の詩人についての書評や、世の多くの雑誌に載っている書評ほど残酷でもない。

僕の処女詩集についての書評が、『エディンバラ・レビュー』に載ったときのことを思い出した。憤怒と反抗と侮辱を覚えたが——、意気消沈したり、絶望し

たりはしなかった。とにかく、書評を読んだときの気持ちはあまりいい感じのものではない。しかし、この喧噪の世の中では、特に文筆で立とうとする者は、この文壇という闘技場に入る前に、書評に反撥する自分の抵抗力を認識しなければならない。

人生において苦痛や危険を逃れよう  
 と思っではならない、  
 運命が汝に背くことを嘆いてはならないのだ。<sup>12)</sup>

(Letter to P. B. Shelley, 26 April 1821)

この文面にはバイロンの強い詩人像が現れている。前述のように、処女詩集『怠惰の時』(1807)が、翌年の『エディンバラ・レビュー』(1808年1月号)で酷評されたことに、バイロンは大いに憤慨し、長篇詩『イングランド詩人たちとスコットランド書評家たち』(1809)と題した諷刺詩で応酬して酷評家たちを退散せしめたことを思い出しているのである。そこには次のような表現がある。

A man must serve his time to every  
 trade  
 Save censure--critics all are ready  
 made.  
 Take hackneyed jokes from Miller,  
 got by rote,  
 With just enough of learning to  
 misquote. (ll. 73-76)  
 人はあらゆる商売を勤め上げねばならない。

12) 手紙の最後で引用されている二行連句, "Expect not life from pain nor danger free, / Nor deem the doom of man reversed for thee." はジョンソン博士 (1709-84) の *The Vanity of Human Wishes* (1749) からの引用, "Yet hope not life from grief or danger free, / Nor think the doom of man revers'd for thee." (ll. 153-54) である。文筆活動を志す者は文壇に入る前に自分の抵抗力を知っておくべきだというのである。

唯一とつの例外は酷評だ——批評家はすべて受け売り。

粉屋から陳腐なジョークを仕入れて、丸暗記、

しかも間違っ引用する程度の学問の持ち合わせ。

シェリーに書いたのと同じ趣旨の手紙を、同日に出版者マレーにも書いている。

真実なのかね——シェリーが書いてよこしたことは? 『クォーターリー・レビュー』のためにキーツがローマで客死したというのは。とても残念なことだ——もっとも、詩人としては、キーツは間違っ方向に進んでいたし——コックニー風になることや郊外暮らしで——また、トゥックの『パンセオン』やランプリエールの『古典辞書』を韻文にすることで、駄目になってしまった。——経験したからわかるのだが、書評というものは、駆け出しの著者にはドクニンジンのようなもので、一時、私はそれにうちのめされはした——それが『イングランド詩人たちとスコットランド書評家たち』などを生み出したわけだが——私は再び立ち上がったのだ。——血管を破裂させる代わりに、——クラレット酒を三壇も飲み干し——、その書評には書評子のジェフリーに決闘を申し込んでガツンと言わせるほどの名誉毀損がないとわかって——答えを求め始めた。——しかし、この世のすべての名誉と栄光をもらっても——この殺人的な記事を書くような人間にはなりたくない。——もっともその書評子が触れている——詩をなぐり書きする一派をよしとはしたくないけれど。(Letter to John Murray, 26 April 1821)

バイロンが力説するのは、厳しい書評に対する反抗心こそ創作への原動力となるというこ

とである。しかし、出版者マレー宛の別の手紙では次のようにも告白している。

もう書評はどんなものも送らないでくれ  
— その手のものは、良くて悪くても、  
もう読まないつもりだ — ウォルター・  
スコットだって、自作についての書評は  
読まなかったのだ、13年間も。(To  
John Murray, 3 Nov. 1821)

次の手紙では、バイロンは、キーツと書評との因果な関係に対して中立な見方をしている。

キーツに対する殺人的書評をちょうど読み返していたところだ。— 確かに辛辣で軽蔑に満ちてはいるが、1808年の『怠惰の時』を書評した『エディンバラ・レビュー』のときに比べれば、それほどものではない。書評子は、キーツのうちに、「正當に評価されるにふさわしい程度の才能」、「空想の光」、「天才の輝き」、「言葉の力」を認めている。— 内容は、キーツに対してよりも、リー・ハントに対してもっと手厳しいし、キーツのたった一冊の詩集だけを書評したものであることをはっきり公平に公言している。— 全体的には —、非常に挑発的ではあることは確かだが、決して致命的なまでに痛烈なものではない — もしすでにキーツの内部に病的な感情があったというのでなければ。(Letter from Byron to John Murray, 7 August 1821)

ここでバイロンが言及している書評とは前述の『クォーターリー・レビュー』に掲載されたクロウカーの『エンディミオン』の書評である。

バイロンは、キーツが彼の大作『ドン・ジュアン』(1819-24)の崇拝者であるとリー・ハントから聞かされて、執筆中のその大作に、キーツに関する次のような連を付け加えた。

John Keats, who was killed off by  
one critique,

Just as he really promised something  
great,

If not intelligible, - without Greek

Contrived to talk about the Gods  
of late,

Much as they might have been  
supposed to speak.

Poor fellow! His was an untoward  
fate: -

'Tis strange the mind, that very  
fiery particle,

Should let itself be snuffed out by  
an Article. (Canto XI, St. 60)

ジョン・キーツは、一人の批評家に殺し  
去られてしまったが、

何か偉大なものを心から期待させた折も  
折、

わかりやすいと言えぬにしても、ギリ  
シア語なんぞ使わずに、

その昔、神々がこうもしゃべったろうと  
想像されるほど巧みに、

ついこの間彼らについて語りおおせたば  
かりなのに。

可哀想に！ 彼の運命<sup>きだめ</sup>は世にも拙いも  
のだった。

心という、あの火と燃える粒子が、むざ  
むざ評論ひとつに

吹き消されるがままになるとは、不思議  
なことではあるまいか。

バイロンが、酷評のせいでキーツが死んだとい  
う人口に膾炙した考えをほのめかす一方で、  
最終の二行連句が示しているように、そのよ

13) 実は、キーツは、弟ジョージ夫婦宛の手紙で、『ドン・ジュアン』に対する嫌味を表明している。その「文学的野心に水を差すようなことが書かれている部分」("one against literary ambition" [Canto I, St. 218])に言及して曰く。「ドン・ジュアン (バイロンの最近の俗語を使った詩)」("Don Juan, (Lord Byron's last flash poem"; Letter to George and Georgiana Keats, 18 Sept. 1819; Gittings 311) と。



うな考えを斥けていることは明らかである<sup>13)</sup>。

#### 4. コールリッジの超越

1819年4月11日、キーツは、ハイゲートの路上でコールリッジに会っている。そのときの模様を弟夫妻に説明して次のように書き送っている。

この前の日曜日、ハイゲートの方に散歩したが、マンスフィールド卿の庭園〔訳注：ハムステッド・ヒースのケンウッドのこと〕のそばを曲折している小道で、ガイの病院の实地教授だったグリーン氏〔訳注：コールリッジの弟子で、その哲学の解説者〕が、コールリッジと会話しているのに出会った——その場の様子から考えて迷惑ではなさそうだったので、僕も仲間入りした——それから、約2マイルくらい、市の助役の食後の散歩とでもいった彼のペースに合わせて、コールリッジと散歩した。この2マイルの間に、コールリッジは沢山の話をした——それをリストにまとめてみよう——ナイチンゲール、詩——詩的感覚について——形而上学——さまざまな種類の夢——悪夢——触覚を伴う夢——単一の触感と二重の触感——関連づけられる夢——第一と第二の意識——意志と意志作用の相違についての説明——多くの形而上学者たちの喫煙の欲求に由来する第二の意識——怪物——伝説上の巨大怪物<sup>クラーク</sup>——人魚——サウジーはこれらを信じている——が、サウジーの信念もだいぶ弱められている——怪談——さようなら——彼が僕の方に近寄ってきて最後に立ち去るまで——この間ずっと、僕は彼の声聞いていた——声を聞くという言い方でいいかどうかかわからないが。コールリッジは親切にもハイゲートの家に訪ねるように言っ

てくれた。(Letter to George and Georgiana Keats, 15 April 1819; Gittings 237)

この手紙は、二人の天才が出会った状況、わずか2マイル〔1マイル=1,000歩=1.6km〕の散歩におけるコールリッジの関心、その自由な連想、コールリッジの典型として、自由奔放で脱線につぐ脱線の詩人としての面目躍如を物語る。しかし、キーツによって説明される当のコールリッジについてよりも、手紙の書き手であるキーツ自身の性格、先輩詩人に対する愛想の良さや明晰な記憶力などについても多くを語り伝える内容である<sup>14)</sup>。

悪評も宣伝のうちと考えるならば、書評家によってこき下ろされた詩人たちも何らかの恩義を受けていると言うべきかもしれない。キーツが夢中になって耳を傾けた談話の主であるコールリッジは、『文学評論』(1818)の第三章、無責任な書評を罵倒する章の冒頭で、「著者が批評家から受けた恩恵」と皮肉な章題を掲げて、書評家に対する嫌味たらしい謝辞を表明する。

私の偶然の名声や評判の優に三分の二は、さまざまな名前を付けたさまざまな評論、雑誌、新聞の匿名批評家たちのおかげであること、また詩や散文、詩といっても原文の詩が散文の注釈のおかげで映えるといったような詩で書き、名を馳せた者もあれば馳せない者もいるというような諷刺家たちのおかげであることを、私は真面目に信じもし、また告白するもので

14) この手紙は二人の相性が決して悪くないことも物語る。これより一年以上も前、1818年1月、キーツは、同じようにハムステッドの路上で、ワーズワスに会っている。その時の模様を伝えて、「このところワーズワスの姿をよく見かけていた」(“I have seen a good deal of Wordsworth.”; Letter to Benjamin Bailey, 23 Jan. 1818; Gittings 55)と、わずか一文で済ませる手紙と、コールリッジの談話に傾聴しながら、その内容を克明に記憶していることを示す先の手紙とを比較すれば、キーツの二人の先輩詩人に対する好意は明白に対照的である。

ある。というのも、ある個人の名が、これほどしばしば、このように多くの新聞や雑誌に、またこれほど長い間出たとすれば、このような新聞や雑誌（貸本屋には、『何々文粹』、『何々模範詩文選』、あるいは『逸話集』などの書き物を集めた棚も、一、二段はあるが、こういう評論や雑誌や新聞が一般読書大衆の十分の九を占めているのである）の読者は、それが褒めるために出されているのか、それとも酷評のためなのかははっきりしないが、とにかくその名に親しまざるを得ないからである。（Coleridge 28）

トランセンデントリスト  
さすがは英国最大の超越主義者、コールリッジならではの弁である。マスコミが書評すれば、何となくその書物は市民権を得たような感じになってしまう。酷評する書評のお蔭で作品の売り上げは増大する。皮肉にも、作家と書評は共犯関係にあるのである。両者の関係における皮肉をさらに推し進めてキーツは次のように言っている。

当座だけの関心事とはいえ、僕を押し潰そうとする『クォーターリー』の試みは、かえってより強い世間の注目を僕に向けさせることになっただけで、今や文学関係者たちの間ではみんな『クォーターリー』は自分で自分の首を切ったことになるのではないか」という言い方をしている。（Letter to George and Georgiana Keats, 14 Oct. 1818; Gittings 161）

しかし、批評家としてのコールリッジの書評家に対する偏見はかなり強烈である。『シェイクスピアとミルトンの七つの講義』（*Seven Lectures on Shakespeare and Milton, delivered 1811-12, published 1856*）の第一講義で、書評家を説明して曰く。

Reviewers are usually people who would have been poets, historians,

biographers, &c., if they could; they have tried their talents at one or at the other, and have failed; therefore they turn critics. (Kemp 206)

書評家とは、たいてい、なれるものなら詩人、歴史家、伝記作者、その他になっていたであろう人間のことである。彼らは、これらのひとつ二つでその才能を試してみたものの失敗した。それで批評家になったわけである。

### むすびに

書評は如何に読むべきものなのか。ヴァージニア・ウルフやT. S. エリオット（1888-1965）の書評のように、それ自体が詩的で美しい言葉から構成される評論である場合は、純文学として読み解くことができよう。あるいは、社会経済史の視点から、書評をぶっさらばうに科学することも可能であろう。経済的な理由を別にすれば、人はなぜ書評を書くのか。そもそも書評（書評を書く行為）とは一体どのように解釈すべきなのか。書評の発生について心理学の視点を加えるとどうなるのだろうか。

フロイトの精神分析でいう「昇華」の概念を援用すれば次のようになるだろう。例えば、人に作家になりたいという願望があっても、それが自らの才能の欠如もしくは社会生活の現実にも阻まれると、願望は充足されることなく無意識の世界に抑圧されることになる。しかし抑圧された願望が充足を求めることを止めることはなく、その代償の満足として、夢を見たり白昼夢を見たりすることになる。前述のコールリッジの言葉が示唆していたように、書評という行為も昇華の一変形と考えることができるのだろうか。

19世紀の作家、ディズレーリ（1804-81）の小説『ロタール』（*Lothair*, 1870）に次の

ような一節がある。「批評家とは何者であるか知ってるか。文学と芸術の世界で失敗した奴のことさ」("You know who the critics are? The men who have failed in literature and art." Kemp 49)。ディズレーリの言うことが正しければ、書評家とは、創造的な芸術家として立つだけの能力がなかった人物である。そして、書評とは文学に遺憾を抱く人物<sup>ルサンチマン</sup>の怨恨 [= 弱者が力ある者に対し、憎悪・嫉妬・復讐心などを心に鬱積させること] の表明であるとすれば、ある意味では、書評家とは作家にとって最も危険な読者ということになる。

果たして、書評(書評を書く行為)とは作家になれない文士が頭角を現そうとしたり、自らの恨みを晴らそうとするための代償の行為であろうか。作家としての創作ができないから書評を書くと考えたもう一人の作家は、ドライデン(1631-1700)、後のジョンソン博士から「イギリス批評の父」と呼ばれるまでに重要な業績を残した文芸批評家でもある。『グラナダの征服』(*The Conquest of Granada*, 1670)には、次のような二行連句<sup>カブレット</sup>がある。

They who write ill, and the who  
ne'er durst write,  
Turn critics out of mere revenge and  
spite.

うまく書けない奴や書こうとしない奴が  
復讐心と腹いせから批評家になる。

(Kemp 46; underlined mine)

書評において「書く」(write)行為は、未だにドライデンの悪意のある「腹いせ」(spite)と押韻する傾向にあるのだろうか。

無論、書評子側からも反論が出るだろう。駄作に向かって文句を言う権利は誰にだってある、と。ジョンソン博士はボズウェルに言っていた。

You *may* abuse a tragedy, though  
you cannot write one. You may  
scold a carpenter who has made you  
a bad table, though you cannot  
make a table. It is not your trade  
to make tables. (25 June 1763;  
Herzberg 74)

自分で悲劇が書けなくなつて、その悪口を言って一向に差し支えない。テーブルを作ることができなくなつて、不細工なテーブルを作った大工を叱っても構わないじゃないか。テーブルを作るのは君の商売じゃないんだから。

事実、シェイクスピア(1564-1616)も『ジュリアス・シーザー』のなかでローマの一市民に言わせている。

Tear him for his bad verses, tear  
him for his bad verses. (*Julius Caesar*, 3. 4)

八つ裂きにしまえ、へたな詩なんか書く奴は。へたな詩のために八つ裂きにしまえ。

結局、賢明な作家は書評など相手にするべきではないのであろうか。

シェイクスピアと並ぶ英国のもう一人の国民作家ディケンズ(1812-70)は、劇評に落胆したマクリーディ(1793-1873)、彼より19歳年上の俳優・劇場支配人を励まして、旅先

15) "How can a man like Macready... fret and fume and chafe himself for such lice of literature as these?" ウルフの『書評論』が収められているペンギン版のテキスト, *Virginia Woolf, The Crowded Dance of Modern Life: Selected Essays*. Vol. 2. Ed. Rachel Bowlby (Penguin Books, 1993) の "NOTES" はこの引用の典拠が不明だと言う。「引用の出典は不明。ウルフが創作した可能性もあり得る」("the source of this quotation has not been located. It is just possible that Woolf made it up." Bowlby 212) と。無論、ウルフの《捏造》などではない。1842年4月1日、ディケンズが、アメリカのオハイオ川を遡行する、ピッツバーグからシンシナティに向かう蒸気船の上から偉大な俳優マクリーディ書き送った手紙の一節である。

のアメリカから手紙を書き送っている。

一体、どうしてマクリーディのような人間が、文学につくこんなシラミ〔訳注：日曜新聞の記者〕のために、くよくよし、やきもきし、いらいらするのでしょうか<sup>15)</sup>。卑劣であることに加えて、彼らは別の理由からもシラミだと言ってもいいでしょう——というのも彼らは人の頭のなかに巣喰うからです。（中略）それほど卑劣で些細なことが——瞬とはいえ、大兄の心を掻き乱すとは、不思議に思ったものです。ごたいそうな戯言だ、と大兄は言われるかもしれませんが——実際、そうなのです。小生だって漠然と誰かの首根っこをひつつかんでやりたい気持ちにならないではありません。それもこれも、これら取るに足りないシラミたちが放った矢の結果です。しかし、それを感じたからと言って、その方がより合理的だというわけでもありません。というわけで、私は批評を克服するという誓いを立てます。無関心になり、自分の価値を確信し、彼らに勝手にしろと言うことで、勝利を勝ち得るのです。（Letter to W. C. Macready, 1 April 1842）

ディケンズは、月刊分冊の売れ行きには敏感ではあっても、自作の価値については絶対的自信にあふれた、いわば超書評の強者作家である。

ディケンズの文学的弟子であるルイス・キャロル（1832-98）も『シルヴィーとブルーノ完結編』で言っている。

作家は、自作についての書評などは絶対読むべきではない、というのが私の強い自説です。好ましくない書評はほぼ確実に作家を不機嫌にさせますし、好ましい書評は増長させるのです。そしていずれの結果も望ましくないのです。（*Sylvie*

*and Bruno Concluded*, 1893; Kepm 207)

これはすでに見たバイロンの書評に対する態度である。

しかし、「率直かつ知的な読者が、自作について何とと思っているかを知することは、作家にとって、何よりも大切な、一番興味ある問題である」（Woolf 211）と、ウルフが言っているように、作家にとって、書評は貴重な読み物のようである。現代の作家は書評をどのように判断しているのか。現代の掛け値なしに第一級の英国の小説家カズオ・イシグロ（1954- ）は、日刊紙『ガーディアン』に掲載されたインタビューで、次のように言っている。「プロの作家として生きてきて今やっとわかったことは、私にとって唯一の役に立たない書評とは、嘘がある書評ということです」（"I have spent years as a professional writer and what I know now is that the only review that is no use to me is a review that lies." Mackenzie）

畢竟、作家も、自らの高慢と偏見を克服して真実に目覚めなければならないようである。文芸ジャーナリズムに咲く書評というバラにも必ずトゲがあるということ。

#### Works Cited

- Allot, Miriam, ed. *The Poem of John Keats*. London: Longman, 1970.
- Bowlby, Rachel, ed. *Virginia Woolf, The Crowded Dance of Modern Life: Selected Essays*. Vol. 2. Penguin Books, 1993.
- Coleridge, S. T. *Biographia Literaria; or Biographical Sketches of My Literary Life and Opinions*. 1817. Ed. George Watson. London: J. M. Dent, 1975.
- Croker, John Wilson. "Keats, *Endymion*: A Poetic Romance." *Quarterly Review*, Vol. 19, No. 37 (April 1818): 204-8.
- Doi, Kôchi. *Select Letters of English Poets*.



- Tokyo: Kenkyusha, 1929.
- Frederick, L. Jones, ed. *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1964.
- Gittings, Robert, ed. *Letters of John Keats*. A Selection. Oxford: OUP, 1970
- Gross, John. *The Rise and Fall of the Man of Letters: A Study of the Idiosyncratic and the Humane in Modern Literature*. The Macmillan Press, 1969.
- Herzberg, Max J., ed. *A Selection from the Life of Samuel Johnson, LL. D. by James Boswell, Esq.* Boston, New York & Chicago: D. C. Heath & Co., 1916.
- Kemp, Peter. *The Oxford Dictionary of Literary Quotations*. OUP, 1997.
- Higgins, David Minden. *Romantic Genius and the Literary Magazine: Biography, Celebrity, Politics*. Routledge, 2005.
- Lockhart, John Gibson ("Z."), "On the Cockney School of Poetry, No. IV," *Blackwood's Edinburgh Magazine* (Aug. 1818): 519-522.
- Mackenzie, Suzie. "Into the Real World." *The Guardian*, 15. May 1996.
- Marsh, George L. & Newman I. White. "Keats and the Periodicals of His Time." *Modern Philology*, Vol. 32, No. 1 (August 1934): 37-53
- Matthews, G. M. *Keats: The Critical Heritage*. London: Routledge and K. Paul, 1971.
- Nicolson, Harold. *Tennyson: Aspects of His Life, Character and Poetry*. London: Constable, 1923.
- Prothero, Rowland E., ed. *The Works of Lord Byron, Letters and Journals* Vols. 1-6 A new, rev. and enl. ed London: J. Murray, 1898-1901
- Saito, Takeshi & Kôchi Doi, eds. *Selected Poems of Percy Bysshe Shelley*. Tokyo: Kenkyusha, 1922.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*. Ed. Thomas Huchinson. OUP, 1905.
- Strout, Alan Lang. "Christopher North' on Tennyson." *RES*, 14 (1938): 428-39.
- Woolf, Virginia. Reviewing. [Hogarth Sixpenny Pamphlets, No. 4. London: Hogarth Press, 1939] *Collected Essays*. Volume 2, Hogarth Press, 1966, pp. 204-15.
- グロス, ジョン. 『イギリス文壇史 — 1800年以後の文人の盛衰』橋口稔・高見幸朗共訳, みすず書房, 1972.
- 出口保夫. 「近代英国文芸雑誌の系譜」『英語青年』127巻12号 (1982年3月1日号): 729-31.
- . 「イギリス文芸雑誌の発達(1)~(7)」『英語青年』129巻1~7号 (1983年4月1日号~1983年10月1日号): 129-338.